



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手^{ましゅ}はまだこの地^{おほ}を覆^{すた}うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界——

上將軍^{じょうしょうぐん}レインたちは、敵対する魔族に捕らわれていたレイグルを無事に救出した。レイグルの心情はさておき、こうしてサンクワールとザーマインの同盟は成った……はずである。

ザーマイン^{きょう い}の脅威が一時的にも取りのぞけた今、次にやるべきは、魔族たちによる大陸各地への無差別攻撃を止めることだった。

街や人^{ようしや}が情け容赦なく蹂躪^{じゅうりん}されるこの残忍な行為をやめさせ、戦争に一定のルールを作らない限り、世界は荒廃するばかりである。

だが、魔族が素直に交渉に応じる可能性はほとんどない。そこでレインは、魔族軍の指揮官^{し きかん}であるミライに狙いを定めた。彼女を捕らえて人質とし、魔王と直接交渉をするのだ。

そのために、レインは仲間たちとともに、ミライがいるクリスタルパレスへ奇襲をかけることにした——



※度量衡^{どりょうこう}はあえてそのままにしています。

レイン

攻勢に出る 15

よしの たくみ
吉野 匠

《登場人物紹介》

レイン：25 歳だが、肉体年齢は 18 歳で永遠に停止
本編の主人公で小国サンクワールの上將軍。本人曰く、「傲岸不遜と常勝不敗が売りの、世界最強の男」。しかし、時に隠れた優しさを見せることも。

シェルファ・アイラス・サンクワール：16 歳
サンクワールの新国王。形式的には主従関係にあるが、そんなことは関係なくレインが大好き。最近、急に人格が変貌する時がある。

ラルファス・ジュリアード・サンクワール：25 歳
本姓はジェルヴェール。レインの同僚で、サンクワール建国の祖である五家の一角。

ギンター・ヴァロア：年齢不詳……外見は 20 歳そこそこ
常に苦い表情を崩さない、レインの股肱の臣。寡黙で有能な男。主に諜報や工作担当。

シルヴィア・ローゼンバーク：3700 歳以上
ヴァンパイア・マスター。元始のヴァンパイアにして、ルーンマスターの始祖でもある。

ノエル：120 歳前後
超強気な魔人少女。魔族の中では若い、上位魔人として魔界でも一目置かれている。

リューン：見かけは大人びた少女
聖域にいたホムンクルス。レイグルが無視できないほどの力を持っているらしい。

クレア：16 歳
謎の組織を束ねる盲目の少女。人々に仇なす魔人を一掃しようとしている。

タルマ：17 歳
クレアの姉。妹と組織の行く末を憂えていた。

レイン（少年）：15 歳
クレア的能力メモリーズによって出現した少年時代のレイン。

ウェンディー：少年レインよりやや年上に見える
霧の国のヴァンパイア。少年レインに協力するため、行動をともにする。

ノース：年齢不詳（ただし見た目は少年）
過酷な魔族の世界を嫌い、自分の殻に閉じこもることを望んだ魔人。

フォルニア・ルシーダ・シャンドリス：23 歳
シャンドリスの皇帝。妾腹の子だったが、父王亡き後、政変の末に王位に就く。

ジョウ・ランベルク：年齢不詳だが、見かけは 20 代前半
シャンドリスの大將軍。將兵達からは尊敬を込めて「不敗の神將」と呼ばれている。

ミライ：年齢不詳
新たなトップスリーの一人。レイグルとは敵対関係にある。

アリアドネ：年齢不詳。容姿は少女のように幼い。
ミライに協力する魔人。周囲からは侮られているが、その実力は本物。

クラレンス：年齢不詳だが、少年のような容姿
上位魔人で、かつてのトップスリー。現在はレイグルに味方する。

レイグル王：年齢等は不詳
大国ザーマインを統べる王。5 年前、前王を倒して玉座に就いた。恐るべき力の持ち主。

目次

プロローグ 新たなる魔王とミュールゲニア各地の襲撃 7

第一章 ガルドシュタインの戦い 20

第二章 攻勢に出る 87

第三章 クリスタルパレス奇襲 133

第四章 少年レインの決断 200

エピローグ 新たなる魔王の降臨 257

あとがき 276

プロローグ 新たなる魔王とミュールゲニア各地の襲撃

——直属部隊を編成し、ミライがミュールゲニアに本格的に侵攻する、少し前のことである。

その日、魔界の帝都にある城で、ミライは新たな魔王の御前にいた。

新たに魔界に君臨する「全能なる君」は、最近亡くなっただばかりの以前の魔王と同じく、近付くだけで巨大なプレッシャーを感じさせる男性だった。なぜか眼前に立っていても、どのような顔をしているのか、よくわからない。

あのバルザールと名乗るフード男と同じく、なんらかの擬態の術でも使っているのか、髪の色くらいはわかるが、その他の特徴はさっぱり掴めなかった。

顔を見つめても、黒い影のようになっていて、顔の判別がつかないということだ。

辛うじてミライにわかるのは、新たな魔王は黒髪であり、服装も極めてラフで、クラブットなどは着けず、裾の長い上着をシャツの上に着ていることだった。

しかも、シャツのボタンは上が二つほど外されている。

とはいえ、先の魔王と同じく黒を好むのか、服装が黒で統一されているのは共通する。ちなみに、側近のミライですら、魔王の本名を知らない。

彼自身が名乗らないし、そもそも魔族の王は「全能なる君」と畏怖を込めて呼ばれる習わしだからだ。

「我が全能なる君よ」

跪こうとしたミライを制し、新たな魔王が席を立つ。

「今から出発か」

わざわざミライの前に立ち、声をかけた。

「はっ。吉報をお待ちください！」

「……どうかな？ 俺は、そう簡単にはいかないような気がする」

魔王その人は、なぜか考え込むような口ぶりで言った。

しかし、戸惑ったミライが問い返そうとすると、彼はなにげない口調で続ける。

「俺は、亡くなった魔王が嫌いじゃなかった。だから、彼が生きている間は、あえて魔界に覇を唱える気もなかったのだが……残念ながら、あの方はもういない。立つべき時が来たと思っている」

「そうあるべきかと思えます」

ミライは恭しく低頭した。

「先の陛下が亡くなった今、それ以上の実力者であらせられる、貴方様が魔界には必要です」

感情を込め、心からの言葉を返した。

元々彼女は、齒の浮くようなお世辞などとは一切無縁に生きてきた戦士である。

真剣なのは魔王にも伝わったと見えて、苦笑するような気配があった。

「魔界内の敵対勢力を片付ける仕事が進めば、俺も行こう。それまで、ひとまずおまえに全権を預ける」

「ありがたき幸せ！」

「……ミライ、おまえから見て、俺は天才だと思うか？」

なぜか、からかうような口ぶりで魔王が問う。

ミライは首を傾げつつも、即答した。

「私はつい先日、我が君に戦いを挑み、そして敗れるべくして敗れました。他にも、先の陛下の崩御以降、我が君に挑み膝を屈しなかった者は一人もいません。我が君の年齢を考えれば、これは驚くべきことだと思います。天才と言わずして、他にどう表現いたしましょう」

「ありがとう」

落ち着いた声音で言うと、魔王はミライの右の頬に手を当てた。
一体、どういうつもりかわからなかったが、ミライにとって不快ではなかった。
それどころか、少し頬が熱くなったほどだ。

「人間から見れば天才だらけとも言える魔界内にすら、俺のような知られざる規格外の戦士がいた。ミライ、おまえは向こうの世界に着いても、そのことを忘れずにいろ。……死んでも侵攻を成功させる、などと俺は言わない。這いずってでもいいから、生きて俺のところへ戻ってくれ。おまえの無事を祈っている」

「……もつたいなきお言葉です」

近頃、新たに二人のトップスリーが決まったと聞き、心穏やかでいらなかったミライにとって、主人の氣遣いは柄にもなく胸に染み込んだ。

というより、この謎の「全能なる君」は、どういうわけか懸命に忠義を尽くしたくなる、不思議な男なのである。実力はおろか、その魅力も先の魔王陛下に勝るとも劣らないようだ。

なにしろ、他人に対する興味が極めて淡泊なミライにすら、「今後私は、この人のために戦おう！」と本気で思わせるのだから。

実力のみが全てを決めるという、魔界の原則に染まりきっているミライにとって、これは希有なことと言えるかもしれない。

深々と一礼し、ミライは魔王の御前を辞去しようとしたが——ふと、どうしても尋ねたくなり、振り向いた。

「我が全能なる君、お訊きたいのですが——」

「俺が、自分の姿をくらましている理由だろうか？」

元の場所ですったまま、魔王が冷静に指摘する。

「さすがにご慧眼であらせられます」

「そのうち、なぜ俺があえて顔を見せずにいるのか、否応なくわかる日がくる。……まあ、実は頬にでつかいアザがあつて、それを隠すためなんだがな……はははっ」

真偽不明の理由を述べると、魔王は軽やかに笑った。生真面目なミライとしては、反応のしようもない。そもそも、今の言葉が本当か冗談なのかすら、判別がつかなかった。

だが不思議と腹を立てる気にはならず、ミライは低頭して今度こそ部屋を辞した。
あのお方がそう言うのであれば、いずれ真実は明らかになるだろう。

☆

一方、ミュールゲニア世界では、魔族の大規模侵攻に対して、各国が対応に追われていた。

たとえば、サンクワールから遠征した形の姫王の軍勢は、ラルファスとレインを指揮官として、いまだにアヴェールン目指して行軍中である。

現在はポートフォリスの国内にあり、あと数日もすればアヴェールンに入ることになるだろう。ただし、肝心の姫王はもちろん、レインとラルファスの上將軍二人も、今は軍勢を離れている。

レインは一旦、クラレンス達と一緒にレイグルの救出へと赴き、作戦成功後に一度は戻ってきたのだが、休む暇もなく、今度は複数の仲間を連れて、またしても軍を離れた。

それというのも、ガルドシュタインの国境線に、魔族軍が接近しつつあるからだ。

彼の国で滞陣中のシャンドリス軍の要請だということだが、レインに半ば無理矢理同行して、ラルファスやセノアまでそちらへ赴いてしまった。そのために、今やサンクワール軍を指揮しているのは、実質的にレインの副官のレニ一人というていたらくである。

「も、もの凄く不安だ……早く帰ってきてほしいよ、本当に」

荷駄の警護に当たっていたユーリやセノアのそばで、レニ自身が不安になるようなことを述べてくれた。

そろそろ夕日が沈む時刻なので、余計に心細くなつたのかもしれない。

「仮にも現場指揮官が、部下の前でそんなこと言わないでくださいよっ」

馬上のレニを見上げるようにして、ユーリが早速、文句をつけた。

口にはしないが、実はセルフイーも友人と同意見だった。

「そもそも、わたし達が警護しているこの荷物って、一体、なんなんですか？」

カバールのつもりか、荷駄全体に布をかけてあるせいで、どんな荷物なのかさっぱりわからないのである。しかも、軍勢の最後尾にあつて数頭の馬で引いているこの荷だが、やたらと重いらしく、しよっちゅう馬を変える必要があるのだ。

つい最近、どこからかレインが取り寄せたらしいが、怪しいことこの上なかった。

「あ、それあたしも気になるっ。なんなんですか、ギウンターさんっ」

なぜか今回、セルフイー達と同じく最後尾で警護についている、ギウンター・ヴァロアにユーリが声をかけた。

馬上のギウンターはいつものごとく、「うるせえっ、俺に話しかけんじゃねええっ」と言わんばかりのしかめっ面を見せたが、一応、返事はしてくれた。

「最近、大陸中の街や都市で、魔族達の襲撃が相次いでいるのを知ってますか？」

「知ってますよ、ええ」

さりげなく聞き耳を立てていた、レニが答えた。

「侵攻してきた新たな魔族の軍勢が、どういうわけか集団であちこちを襲って、壊滅させているらしいですね。將軍がボヤいていました……というより、あれはかなり腹を立ててたなあ」

「そう、その襲撃です。新たな敵は、なぜか適当な街を選び、無差別攻撃を始めているのです」

レニの後半の感想はさらりと無視して、ギンターが頷いた。

「各地を個別に襲い、そして完膚なきまでに街を破壊し、人々を殺戮してさっさと飛び去る……時には移動中の軍勢が襲われることもあるようです。つまり、我々のようないきなりガツンと脅され、レニの顔色はめっきり悪くなった。」

「この荷は、そのための用心ですな」

「な、なんとっ」

ギンターの言い様に、レニはますます不安に駆られたようだった。

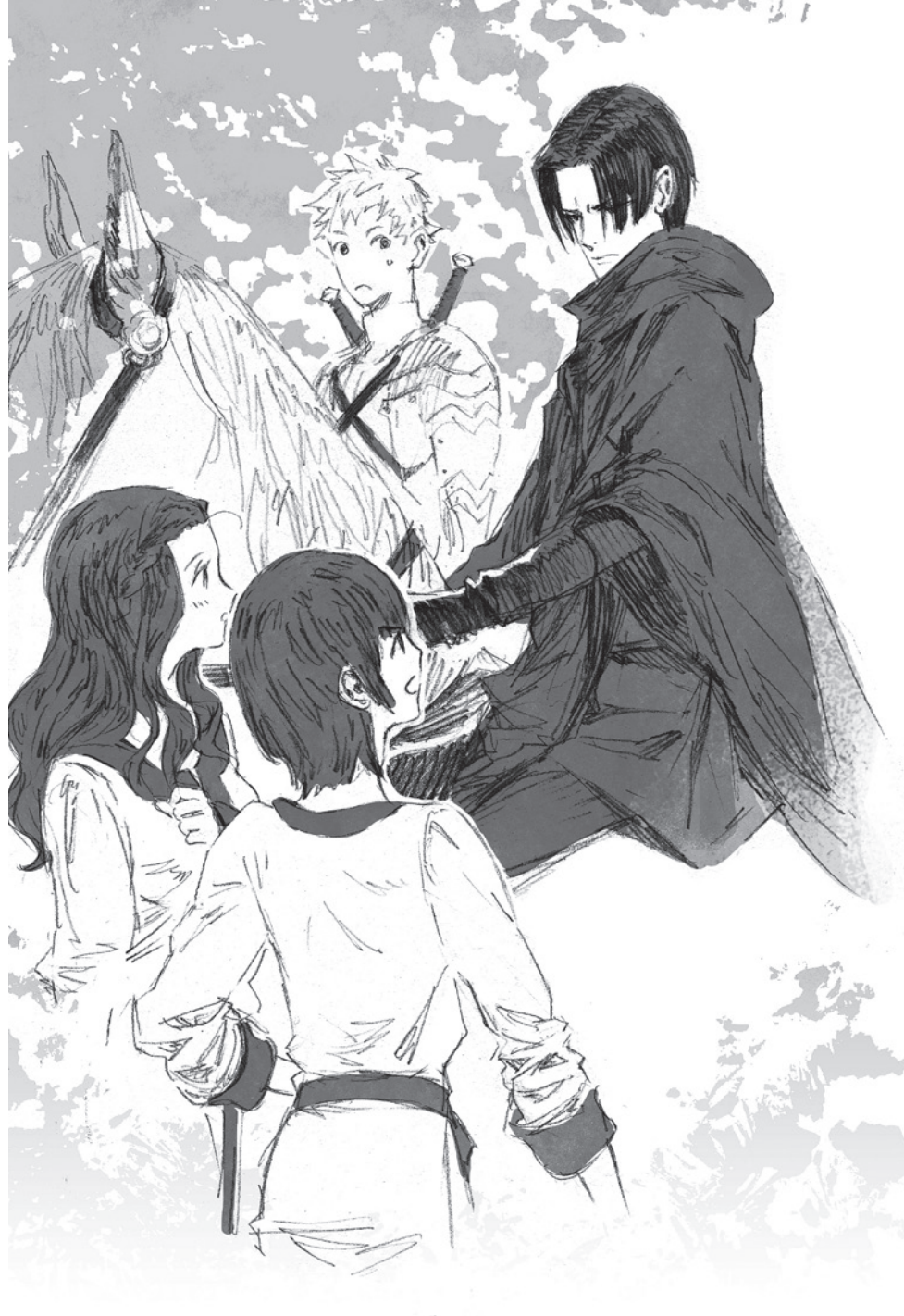
「本当に我々も危ないんですかつ。じ、自分は特に聞いてませんけどっ」

「聞いていようがなかるうが、関係ありません。狙われて当然でしょうな」
ギンターはむつつりと即答した。

「レイン様の軍でもあるし、むしろ狙われない方がおかしいでしょう」

「あああああっ」

レニは頭を抱えていきなり呻きはじめた。



「訊かなきゃよかったあ！」

最後尾からレニの悲鳴が響いたせいか、驚いたように前方の兵士達が次々振り向く。

前方から興味津々の顔をしたミランまで近付いてきたほどだ。

「け、結論として、この荷はなんなんですか？」

呆然と聞いていたセルフィーは、おそるおそる尋ねた。

「シェラザード山脈の戦いの折に、ザーマイン軍が遺棄していた魔法石ですよ」

「魔法石!？」

「魔法石って、マナを大量に含むという、マジックアイテムのアレ？」

セルフィーとユーリが、同時に声を上げる。

「左様。もうめばしい魔法石は払底していると思われていましたが、どうやらザーマインにはまだ、大量に残っていたらしく、敵軍が遺棄していた魔法石をレイン様が回収されていたのです」

めんどくさそうに説明し、そのまま沈黙してしまう。

……なぜ魔法石を運んでいるのかという説明が、絶望的に足りていない。

レニやミラン、それにセルフィー達の視線を一斉に受けたせいか、ギウンターはまたしても不機嫌そうな面持ちになった。「全部か、俺は一切合切、全部をおまえらに説明しなきゃいかんのか」という内心の思いが、ありありと表情に出ている——ように見える。

「あまり知られていませんが、マジックリプロダクションという魔法があるのです」

ため息をついた後、ようやく説明してくれた。

「これは、あらかじめ必要な量の魔法石に対して、コマンドワードに応じて術者の魔法を即座に再現するためのものです。この魔法石には、既にレイン様がマジックリプロダクションの術を仕掛けられているんですよ。だから、重要な荷物なんです」

「惜しい、わかりそうでまだわからないわっ」

ああ、おめーはそうだろうなという目つきでギウンターがユーリを見たが、返事はなかった。セルフィーの見るところ、それ以上の説明がめんどくさくなったらしい。

「あゝ、つまり、こうじゃないかな？」

こっそり聞いていたミランが、遠慮がちに呟いた。

「多分だけど——コマンドワード一つで、この魔法石が即座にレイン様の魔法をその場で再現する……ということじゃない？」

最後はギウンターの方を見たが、彼はほんの一ミリほど頭を動かした。
おそらく「その通りである」と言いたいのだろう。

「それならそうと、最初から順序立てて説明すればいいのにっ」
唇を尖らせて、遠慮なくユーリが酷評する。

ギュンターに対してこれほど辛辣な口が利けるのは、彼女くらいだろう。自分なら怖くてとても無理である。セルフィーは妙なところで感心した。

もつとも、苦情を言われたギュンターは「本当に知るべき者以外に、特に説明の必要はないと思いましたので」とぼそつと言い返しただけだった。

つまり、暗に「おまえ程度の下っ端は黙っとれ！」と言いたいわけだ。

たちまちユーリが険悪な顔で唸り、一気に空気が悪くなったが……幸い、今の説明で多少復活したレニが、期待に満ちた顔で尋ねた。

「將軍の攻撃魔法がいつでも発動できるって話なら、それは心強いな！ ちなみに、將軍の魔法についてでもたくさんあるけど、どれかな？ 自分も全部知っているわけじゃないけれど」

「……ある魔法術を、ご自分なりに改良したものだと同っています」

皆が息を詰めたような顔でその先を待ったが、ギュンターはまたしても沈黙を守った。
やむなく、セルフィーがそつと訊いた。

「つまり……それ以上は、わたし達には秘密ってことですか？」

「簡単に言えば、そういうことです」

眠るがごとく目を閉じ、ギュンターは愛想なく答えた。

「いや、難しく言ったってそういうことだよっ」

ユーリが言い返したものの、ギュンターはどこ吹く風で馬に揺られていた。
本当に眠り込んだんじゃないでしょうか、とセルフィーが思ったほどだ。

第一章 ガルドシュタインの戦い

その日の夕刻、レインが仲間と一緒にハイムシュタット城（ガルドシュタインの主城）を訪問中だったのは、もちろん偶然ではない。

クラレンスの要請でレイグル王を救出した後、レインはまずアヴェルーンを目指して行軍中のラルファス達のもとへ戻り、コトの顛末^{てんまつ}を伝えはした。

しかし、そこで一休みする間もなく、今度はガルドシュタインへと向かったのである。

これは言うまでもなく、援軍として先に彼の地^かへ赴^{おもむ}いた、シルヴィア達に助力するために他ならない。

レインとしては、本来ならレイグル王とクラレンスを交え、新たな盟約を結ぶ算段を付けるべきだったが、それより先に、ガルドシュタインの一件を早急に解決する必要があったのだ。

なにしろ、レイファンとガルドシュタインの国境線にたむろする魔族軍が、いつ侵攻してくるか

わかったものではないので。

さらに言えば、救出されたばかりのレイグル王が不機嫌極まりなく、レインは「今、盟約についてこいつと話すのは、時期が悪すぎる」という意見だった。

これにはクラレンスも賛成した。そしてなぜか彼自身は「新たな盟約を結ぶ約束でレイン達に助力を頼んだので、ついては、その盟約について考えておいてくれたまえ」と最低限の説明だけを行い、ゲイニス城から引き上げるレイン達についてきてしまった。

レイグル王自身が今後どうするかはわからないが、まさか自らの居城であるゲイニス城^{から}を空っぽにするわけにもいくまい。勇者を擁^{よう}するヴォルデシアの侵攻もあることだし、しばらくは居城から動けないはずである。

ともあれ、クラレンスがその転移の能力を使い、レイン達を行軍中のサンクワール軍まで送ったのは、助けられた側としては当然の礼儀だったのかもしれない。

しかしレインもまさか、彼がさらにガルドシュタインへの転移も、気前よく引き受けてくれるとは思わなかった。

とはいえ、ノエルもシルヴィアもガルドシュタインへ赴^{おもむ}いている以上、クラレンスの転移能力をアテにするのが、最も短期間でガルドシュタインへ着く方法には違いない。

結果的に、ハイムシュタット城には、レイン達と元から留守居を務めていたフォルニアの軍勢、

さらには本来敵であるはずのクラレンスまでが集うことになったのである。

さらに意外なことに、行軍中のサンクワール軍を訪問していたポートフォリスの国王、アイゼンまでもが同行してきた。

ただし、国境線に張りついた魔族軍は意外にも今のところは動く気配がなく、援軍に赴いたレイン達は、思わぬ滞在を強いられることとなった。

☆

ハイムシュタット城の最上階に張り出したバルコニーでテーブルに着き、レインは夕日が沈む空を眺めている。

つまり、特に何もせずに酒を飲んでいるわけだ。

そのうち、何度目かのウイスキーのお代わりの際、思わず独白した。

「援軍の必要があつたとはいえ、ここに戦力が集中して、どうすんだよ！」

ちなみに今の愚痴に等しい独白は、幾つかのテーブルに分散して座す仲間を見て、思わず口走っ

たものである。

当初から一緒だったシエルファとリユーン、それにここへ送ってくれたクラレンスまではやむなしとしても、なぜか新たについてきたラルファスとナイゼル、それにレインの副官のセノア、さらにはどういうつもりかポートフォリスのアイゼン国王に、元からこの地にいたシャンドリスの女王フォルニアとその側近のジョウ・ランベルクさえいる。

トドメに、先にこの城に到着していたノエルとシルヴィアまでもがすぐ右隣のテーブルにいて、豪快にタタ酒を呷っている真っ最中だった。

ノエルなどは、ただ飲むだけではなく、控えていた給仕のメイド達に次々に注文を出し、「どれだけ食べる気だ？」とレインが呆れるほど、せっせと料理を胃に詰め込んでいた。

鯨飲馬食とは、このようなことを言うのかもしれない。

他にも、フォルニアを警護する兵士達も遠巻きに囲んでいて、広大な白亜のバルコニーは、ほぼ満杯の有様だった。

「私もたまには、留守を守るのではなく、戦いに加わりたさ」

レインと同じテーブルに着いているラルファスは、レインの言い草に対して苦笑気味に述べた。

「留守を務めるだけなら、おまえの副官のレニだけでも十分だろう？ それにいざとなれば、ノエル殿達の誰かに頼み、すぐに戻れるしな」

「それにしたって、軍の重要人物が全部ここに揃うのもどうかと思うがなあ……あちこちで魔族が出没しているこの時期に」

ついでに言うと、サンクワールの国主であるシエルファは、既に本来の彼女の意識を取り戻して、レインの真横に座っている……というか、にこにこしながらレインに寄り添い座っていると表現した方が正しいだろう。

それを離れた場所から、セノアが洗面で見つめていた。

「まあそう言うものではないぞ、レイン殿」

左隣のテーブルにいたフォルニアは、酒が入って随分と上機嫌らしく、くすくす笑った。

「なにしろ、ジョウから心臓に悪い報告ばかりが入っていたからな。我がシャンドリス軍に隙なしといえども、さすがに数万規模の魔族軍が国境線に集結している現状は、おもしろくない。軍勢を引き連れていないとはいえ、貴公達の来援は心強い」

しかし——とフォルニアはほんの一瞬だけ、一人で静かに飲んでいるクラレンスと、相変わらず豪快に食事を続けるノエル、それに皆と離れた場所にいるリューンを順番に見やり、肩をすくめた。「まさか、新顔の戦士や魔族戦士まで助けてくれるとは思わなかったが」

「その三人なら心配ない」

地獄耳の三人が聞きつけて抗議……あるいは実力行使に出ないうちに、レインは素早く口を挟ん

だ。

「俺と同じく、国境にたむろってる魔族どもは敵という立場だ」

「その通り」

遠くのテーブルにいたくせに、やはりしっかりと聞いていたらしいクラレンスが、にこやかに頷く。ちなみに、いつもの純白のスーツで優雅に両足を組むその姿は、誰が見ても貴族の貴公子にしか見えない。

「僕はこう見えて、レイン君のファンでして……それに、今は借りもできたので、多少のお手伝いなら、喜んでしますよ」

「それは……実にありがたいことだが」

フォルニアは腹心のジョウと顔を見合わせてから、レインをまじまじと見つめた。

実のところ、最近の戦いの中心が中原に限らず、魔族が次々と各地の城や街を襲い、大規模魔法などで瞬く間に占拠、あるいは街そのものを消滅させてしまうという、頭の痛い事件が増えている。

レインは個人的には、この無茶なやり方に戦術的な意味などなく、単に人間に魔族への恐怖を植えつけることが目的だと睨んでいる。

戦う前から、戦意を摘み取ろうというわけだ。

だから、強い援軍はむしろ望むところなのだが——もちろん、なかなかそうは思えない者もいる

だろう。

「しかしレイン殿は、度量が大きいな。ちょっと目を離れた隙に、どんどん魔族の仲間が増えていくではないか」

「リユーンが魔族という推論は、誤りの間違い！ お父様がそうだったというだけだから」

わざわざリユーンが、遠くから反論してきた。

「ザーマインの一件について、どっちかと言えば厄介ごとが舞い込んだ段階だけだな……まだ今のところは」

レインはリユーンの方は無視し、空になったワインの瓶を振る。

入り口付近で控えるメイド達に、さりげなくお代わりの合図を出したのだ。

「当初の思惑通り、休戦と盟約が成立すれば、ようやく差し引きプラスかな」

わざとらしく、クラレンスと目を合わせてやる。

向こうは芝居っ気たっぷりに微笑んだ。

「大丈夫。少なくともレイグルが敵に回っても、今度は僕も彼の敵ということになる」

「それは、どういう意味かな？」

フォルニアの軍師的立場にあるジョウが、すかさず口を挟んだ。

「まだ詳しく話してなかったか？」

レインが、手短かにレイグルを助ける際に自分が出した条件を話してやると、ジョウはゆつくりと口元を綻ばせた。

「なるほど……なかなか抜け目ないな、貴公は」

「当たり前だろ！ なにが哀しくて俺が、何度も煮え湯を飲まされたあいつを、ロハで助けにやらんのだつ」

いささか憤慨してレインが言っていると、ずっとタイミングを窺っていたらしいセノアが、ふいに声を張り上げた。

「そう、そのレイグル王ですっ!?」

どうも、話しかける機会を探っていたのにタイミングが合わず、痺れを切らしたらしい。

「ずっとお尋ねしようと思っていたのですが、そもそも彼の目的は今侵攻中の魔族と違うわけですか。そこがどうも、いまだに私にはわかりかねますが」

わざわざ遠い場所まで立ち上がり、テーブルに両手をつけて語ってくれた。

ただ、これはセノアにしてはひどくよいタイミングであり、しかも質問の内容も皆の疑問を代表していたらしい。珍しく、全員が雑談をやめ、セノアとレインを交互に見た。

今の今まで、うっとりレインの横顔ばかり見ていたシエルファも、思わず真剣な表情を取り戻したほどだ。

さらに意外だったのは、バルコニーの一番隅のテーブルにいたリユーンで、それまでは全く無関心な様子で紅茶を飲んでいたのに、今やレインを睨むように見据えている。

「まあ……彼は誤解されやすい男だからねえ」

静まり返った中、クラレンスがポツンと述べたので、レインは皆の代わりに言ってやった。

「それで納得するヤツがいたら、ある意味で奇跡だよな」

「では、レインはどう考えているの？」

リユーンが真剣勝負のように問う。

例によって、ノースリーブの短い純白の胴衣と、スリットの入ったタイトスカートという姿であり、両足は黒いストッキングに包まれている。

額の中央で分けた前髪の片側に、アクターから贈られたという、大きな白い髪留めがあった。

「あいつに訊いてもまず素直に答えないだろうから、これはただの俺の推測だが」

レインはメイドの一人から新たなワインの瓶を受け取り、また並々とグラスに注いだ。

「最終的にあいつが目指していたのは、おそらく魔族と人間が共に暮らせる世界だろうな」

「……人間を滅ぼすことは、最終的な目的ではないと言われますか!？」

よほど意外だったのか、セノアは碧眼をまじまじと見開いていた。

「もし本当にそれが目的なら、少なくともザーマイン軍内では、魔族戦士と人間の将兵には扱いに大きな差があったはずだし、ザーマインの将兵だってもっとじゃんじゃん離反していただろう。しかし現実には、あいつは本国では大きな支持を受けているじゃないか」

レインは穏やかに反論した。

「たとえば、このガルドシュタインで軍令を破って暴走した魔人のサラだって、レイグルに叱責された上に召還命令を出されている。それに、ザーマイン国内の法規も、特に魔族を意識したものはなっていない。……そこが俺の密かな疑問でもあったんだが、あいつが目指していた最後のゴールが、魔族と人間のための世界であるなら、納得がいく」

「反論するようだが」

フォルニアが、あるかなきかの笑みを浮かべるクラレンスを横目に、ゆっくりと言った。

「しかし、我らの調べでは、レイグル王は国内においても、『他国への侵略が目的だ』と日頃から公言していたそうだが」

「そりゃ、そう言うだろう。実際、侵略してんだから」

レインがあっさり言っただけで、フォルニアをはじめ、幾人も理解に苦しむという顔つきをした。ノエルでさえそうであり、頷いていたのは、実にクラレンスのみだったかもしれない。

ほとんどが洪面じゅうめんを向けているのに気付いたレインは、ため息をついてから、説明してやった。

「あの……とにかく、世の中は言い訳する輩やからが多いんだよ。たとえば、高利貸しは『わしは信用のない貧乏人のために、涙を呑んで金を貸してやっているんだ！』なんてしたり顔で言うだろうし、庶民から必要以上に税金を搾り上げる王は、こう言い訳するだろう。『税がなくては、国はたちゆかぬ』とな。しかし本当は、両名共に心の奥じゃ悟っているはずだ。『もちろんわしは、やり過ぎの面も大いにあるかもしれないが、この方が自分にとって都合がいいからな』と。実際はそれどころじゃないとしても、大なり小なり、自分の本質には気付いている。自分のやりようは、まさか黒ではないとしても、かなり灰色かもしれないと。でも、表だっては絶対にそうは言わないものさ。大抵のヤツは、自分が悪人だと認めたくないから。……しかしだ」

一拍置き、レインは性懲りもなく、また空の瓶を振った。

「レイグルは己がなにをしているのか、ちゃんと理解している。自分がどんなに綺麗ごとを並べようと、所詮は侵略者に過ぎないってことに。事実、あいつがやってきたことは、どんな理想を持っていたように、侵略には違いない。だからこそ、あいつは綺麗ごとを絶対に言わない。訊かれたとしても『俺の目的は侵略だ』とはつきり言う。なんの弁解もしないし、事実、今まで一度もしてこなかったはずだ。口べたな男だから、下手をすると仲間ですら本音を洩らしてないかもしれないな」

あんぐりと口を開けていたノエルを見て、レインは苦笑気味に言ってやった。

「わかるか？ あいつは自分のしてきた行動に対し、一切の言い訳をしない男なんだ。不器用なヤツなんだよ」

水を打ったように場が静まり返ったのは、おそらくここにいるほとんどの面々が、レインの指摘に鮮やかな驚きを覚えたからだろう。

そこでやめておけば大いに感心されただろうに、すぐに余計な一言を付け加えるのが、この男の悪い癖である。

今も、顔を見合わせる皆を見渡し、唇の端を吊り上げた。

「おい、別に感心することはないぞ？ ただの根暗で付き合にくい男ってだけの話だ。可愛げがないとも言いがね」

かつて、レイグル王に対してこれほど遠慮のない論評をした者はいなかったに違いない。

そのせいか、今度はレイン自身が大注目を浴びてしまった。大半は呆れたような表情だったが、クラレンスだけは、ひどく感激した表情だった。

「この僕ですら、根掘り葉掘り尋ねて、最終的に察する他はなかった……はつきり指摘したのは、多分、君が初めてだろうね」

グラスを掲げながら、レインはニヤツと笑った。

「そりゃ、根暗って部分のことか？」

「——！ あははっ」

彼らしくもなく目を丸くし、直後に笑いが弾けた。

「二ついいかな？」

今まで沈黙していたアイゼンが、レインに問う。

「レイグル殿が人間側を殺し尽くす気などないことはわかったが、そもその侵略の理由はなんだろう？ 魔界とやらを出て、こちらの世界へ来た理由は？」

「さあね。侵略される側としちゃ、理由なんぞ二の次だしな。だいたい、魔族の侵攻は今回が初めてじゃないし」

無責任にも、レインはあつさり言つてのける。

「一応の推測はあるが、そりゃクラレンスの方がよくわかってるんじゃないかな」

そのままクラレンスに視線を移すと、笑いやんだ彼が真面目な顔で見返した。

「そうだね……別に隠すほどのことじゃないから白状しておこう。実は、魔界は——」

言いかけたものの、ある一点を見つめ、すぐに黙り込んでしまう。

無論、レインも同じく気付いていて、席を立ちかけていた。

刹那の間を置き、全員の目が「それ」に集まってしまう。

つまり、レインの眼前にいきなり出現した、傾国の剣に！

既に陽が落ちていいるせいか、青白く輝く魔剣は、大いに目立っていた。

立ち上がったレインは、無意識のうちに腰に手をやったが、剣はちゃんとそこにある。となると、答えは一つしかない。

「……こりゃ、前に分割して消えた、もう一振りの傾国の剣か」

いまだに眼前の虚空に浮く剣を見やり、レインは首を傾げた。

「ちよつと待て！」

レインの独白を聞き、食事を中断したノエルが立ち上がった……それも、椅子が後ろに倒れるほどの勢いで。

「しかしそっちは、前におまえが話してくれた、少年のレインとやらが今の所持者のはずだろう。それがなぜ、おまえのもとへ戻るっ!?」

「……なんで俺が責められるんだよ？」

レインは眉根を寄せつつも一応、答えてやった。

「そりやおまえ、この剣が戻ってくるからには――」

「向こうのレインは、人生終了で完全死亡ってこと？ 戦死か、やつぱり変な病気のせい？」

残酷なまでの無邪気さで、リユーンが離れた場所から後を引き取る。

「やつぱりってなんだよ！」

「また、あっさりと退場しちゃったのね。知られざる天才剣士の名声も、アテにならない」

レインの抗議を無視し、リユーンは呆れたように言う。

静まり返っていたせいか、その声は全員の耳にはつきりと届いた。

「しかし……少年の彼とはいえ、そんな簡単にレインが倒されるのかい？」

こいつにしては珍しいことだが、クラレンスが誰に言うともなく独白した。

おまけに呆然としていて、これも彼らしくない。

「おまえがあいつの存在を知ってたのはさすがだが、そこまで驚くことか？」

レインはクラレンスを横目で見やる。

「この剣は、滅多に持ち主を見捨てたりしないぞ。となれば……まあ、おつ死んだんだろうさ。自分で言うのもなんだが、当時の俺の無茶な戦いぶりからして、全然不思議はないが」

軽く言い切り、そつと浮かんだままだった剣を手取る。元々が自分の剣なので当然だが、嘘のようにしつくりと掌に収まった。

「やつぱり俺のそばがいいのか、相棒？」

囁きかけ、鞘から元からある剣を抜き、二振りの魔剣をそつと重ねてみる。密かな予想通り、自然と二振りの剣は一体化してしまう。

付与魔力のせいかな、重量もロクに増えた気がしなかった。

「やはり、液体金属なのかねえ……便利なものだなあ」

レインは一人で感心し、元通りに剣を鞘に収めたのだが――なぜか周囲が静まり返ったままなの
にようやく気付き、そつと振り向く。

まず、座したままレインを見上げるシエルファが、はらはらと涙を流しているのを見て、ぎょつ
とした。

「な、なんです!？」

らしくもない驚きの声を上げて周囲を見渡せば――セノアが立ち上がりかけて、なぜかそのまま
倒れて尻餅をついているわ、ノエルは食べかけの皿を中身ごと自分の膝にぶちまけているわ、ラル
ファスは凍りついたようにレインを見ているわ、シルヴィアはいきなりこっちへ走ってきて、レイ
ンの腕を揺さぶるわで、仲間の大半がとんでもない動揺ぶりを見せていた。

「冗談でしょう!? なにかの間違いよねっ。なんとか言いなさい!!」
まだ腕を掴んで揺さぶりまくりのシルヴィアが、悲鳴に近いような声音で問うた。

「レインがそんな簡単に死ぬわけないわっ」

「將軍が亡くなったなど!」

「どういふことだ、レインっ」

「レインが……レインが……そんなっ」

シルヴィア以下、(床に屍餅をついたままの)セノアとノエルとシエルファが一斉に声を上げ、レインは仰け反りそうになった。

特に、いきなり涙声になったセノアのうろたえぶりは、シエルファと大差ない。

「俺は生きてるだろっ」

思わず抗議の声を上げたが、無視された。

怒れるシルヴィアもたいがい、いつもの彼女ではないが、シエルファの動揺ぶりは特にひどい。

この姫王はよほどショックが大きかったのか、口元を両手で覆い、人目も憚らずにさめざめと泣いていて、悲嘆ぶりを隠そうとしなかった。

とはいえ、彼女達のほとんどが、大なり小なり、似たような状態だったのは間違いない。

さすがのレインも「あんなガキが死んだところで、知ったことじゃないね」などは、口が裂けても言えない状況だった。

「あ……別に死んだと限ったものじゃないだろう」

慰めの言葉を口にしたが、その言葉にやや希望の光を見せたのはシエルファくらいで、大方は、騒ぎがよけいに大きくなったただだった。

「これはぜひとも、確かめにいく必要がある」

我に返ったクラレンスが、席を立てて厳しい声で述べた。

「僕が直接飛んで、調べてこよう」

「こらこらっ、馬鹿吐かせ!」

レインが唸り声を上げると、下半身をべっとりシチューで汚したノエルが、今になってぱつと立ち上がった。

「そうか、その手があった!」

途端に、シルヴィアが割り込む。

「待ちなさいよっ、あたしが先に飛んで見てくるから——」

「三人共、待てって！」

下手をする前一瞬で転移しかねない彼らを、レインはさすがに焦^{あせ}って止めた。

「今の時期にだな、そういう無用な行動を」

……説教しかけた時、エクシードの大きな乱れを感じ、レインはさつと国境の方角を見た。

「タイミング悪いな、本当にいろんなことがいつべんに起きやがる」

他人事のようにため息をついたが、さすがにクラレンス達も大人しくなった。

当然、彼らもレインと同じく感じ取ったのだ……国境に待機していた魔族軍が、ついに移動を開始したということに。

どうやらこのガルドシュタインは、再び戦場となりそうだった。

☆

ある意味では、ガルドシュタイン侵攻軍司令官のルミナスは、運が良かった。

敵と真^まつ先に遭遇^{そうぐう}する場所にいたからだ。

彼はここ数日、北方の砦^{とりで}に駐留^{ちゅうりゅう}する三万近い指揮下の軍勢のうち、およそ八千を率いて、国境地

帯を巡視中だったのだ。

言い換えれば大規模偵察^{ていさつ}であり、今宵^{こよい}は国境線間近で野営していた。

言うまでもなく、この偵察^{ていさつ}は魔族軍が国境近くにいるとの情報を得て、その事実を詳細に確かめるためのものだ。

しかし、もはや真実はルミナスの眼前にある。

夜が更^ふけつつある今、平原の彼方^{かなた}から、魔族の大軍が迫りくるのが遠望できるのだ。少なくとも情報の一部が正しかったのはもちろんのこと、ご丁寧^{ていねい}にも、まさに敵が進軍を始めた直後の光景に出くわしたわけである。

しかし、大半の部下達はこれを運が良かったとは思わないだろうし、指揮官のルミナスとて、「情報の一部は正しかった！」などと喜ぶ気にはなれなかった。

特に、遙^{はる}か地平線の彼方^{かなた}から、魔族軍の大軍が迫ってくるのを見ている今は。

「そんな……馬鹿な。わ、私が報告を受け取った時には、まだ進軍の気配があるとは聞いていませんでした」

馬首を並べた副官が、動揺のまじった声^{こゑ}音で言ってくれた。

ルミナスは皮肉な目つきで彼を見やり、補足してやる。

「さらに言えば、魔獣^{まぐ}の類^{るい}いもまじっていると聞いたが、遠望する限り、ヤツらの大半はその魔獣

の類いだな。むしろ、人間の姿をした魔人の姿がほとんど見えない」
そう、朝焼けに染まる荒野を砂埃すなぼりを上げて迫ってくるのは、どう見ても人間の——いや、少なくとも通常の魔人共ではない。

明らかにこの世界では見慣れない獣達であり、そしてジャイアントの亜種かと思うような巨漢の兵士達である。

そいつらが小汚いズボンのみを身に纏い、巨大な棍棒こんぼうを持ってノシノシやってくるせいで、予想以上に砂埃が立っていた。

前衛を務めるそいつら巨漢兵士の他に、後ろには四つ足の魔獣らしき獣も見えるし、豚ぶたそっくりの顔をした醜い魔獣もどっさりいる。

「魔族軍は多種多様な。どうやら、下位魔族というヤツか……斥候が戻ってこないと思ったら、これだ。全員、始末されていたか」

ルミナスは眩ぎ、背後の自軍を振り返った。

まだ全軍が叩き起こされて間もなく、慌てて鎧を纏う途中の者すらいる。

大半の者が、まだわけがわからずに動揺していて、しかも迫ってくる魔族軍に怯えた目を向けていた。とても戦える状態ではないように見える。

これでは、相手が誰であろうと、勝てるわけがない。

「しよ、將軍……ルミナス様」

副官がなにか言おうとしたのを、ルミナスは片手を上げて止めた。

「言わなくてもわかる。もちろん、戦えるような状態じゃない。我々はいわば、不意打ちを食らったも同然だ」

「ではっ——」

「退くにしても、今逃げれば軍勢が瓦解するぞ」

ルミナスは「退却」を進言しようとしたであろう副官の、機先を制した。

「おそろく、俺達が背を向けた途端、連中は猛追撃してくるだろう。あの軍勢を見る限り、前衛の巨人モドキ共は、足が速そうだ。逃げ切れと思うか？」

「う……そ、それは」

「退却中の軍勢が背後から襲われた時、いかに容易く崩れるか……俺は十分、知っているつもりだ。君はどうだ？」

「た、確かにっ」

副官の目が泳いだが、ルミナスはもはや相手にせず、伝令を呼んだ。

もちろん、一刻も早く陣形を整えるためだが……また副官が叫んだ。

「しよ、將軍っ」

「い、いきなりなんという声を上げ——」
叱責^{しっせき}しかけ、ルミナスは目を見張った。

今の今まで、誰もいなかったはずの眼前に、レインをはじめ、数名の男女が立っている。
驚いたことに、シャンドリスのフォルニアやその側近のジョウ・ランベルク、それにサンクワールの姫王シエルファの顔すらあった。

「おー、久しぶりだな、ルミナス」

口を半開きにしたルミナスのそばへ、レインが当たり前のような顔で近付いてきた。最後にやり合った時と同じく黒くくめの格好^{かっこう}であり、まるで親しい知己^{ちぎ}のような笑顔だった。

ちなみに、最後に別れたのは一騎打ちの折であり、ルミナスは手ひどくやられて怪我^{けが}まで負っているのだが——知らない者が今の光景を見たら、二人は親友同士だと思っただろう。

「あの時は怪我^{けが}させて悪かった。もちろん、もうなんともないよな？」

馬の脇に立ち、ルミナスの太股^{ふともも}辺りを、親しげに何度か叩^{たた}く。

瞠目^{どうもく}するほどの気安さであり、自分が敵であるという自覚が、全くないらしい。

ルミナスは、不覚にもすぐに答えられなかった。才氣^{あふ}溢れる彼ともあろう者が、完全に意表^{いひょう}を衝^つ

かれたのである。

ようやく声が出たと思えば、「は……いや、あの……お久しぶりです」と意味不明なことを口走る始末である。

「うん、もう元気そうだ」

レインは全くと構いなしにうんうんと頷^{うなず}き、ついで振り返ると、迫りくる敵軍を見つめて目を細めた。おそらく彼をここへ連れてきたであろう、シルヴィアという名の女性をはじめ、数名の男女が全員、レインの動向に注目しているようである。

彼らはひとかたまりになって立っていて、レインと敵の魔族軍を見比べている。

呆^{あき}れたことに、その数名の中にはどう見てもポートフォリスの国王であるアイゼンの姿があったし、さらに度しがたいことに、魔人の姿さえあった。

一人はノエルという名の女戦士だが……なんともう一人は、ルミナスのいわば上官である、クラレンスだった！

彼一人が、後ろの方で他人事のように眺^{なが}めていたため、気付くのが遅れたのだ。

「おわっ」

思わず声が出てしまい、ルミナスは慌^{あわ}てて口元を押さえた。

「ク、クラレンス様っ、どうしてここへ！」

「ははは……いや、レインが君の様子を見るっていうのでね」

クラレンスはいつものようにポケットに片手を突っ込んだまま、楽しそうに笑っていた。

「面白いものが見えるかもしれないと思い、ついてくることにした」

「しかしっ」

やっと正気に戻った副官が、怒濤の勢いで文句をつけた。

「彼は、敵ではありませんかっ」

「いやいやいや、それがだいぶ事情が変わってな」

レインがまた気安く口を挟む。

「世の転変は本当にただ事じゃないよなあ。今やサンクワールとザーマインは、プチ同盟状態と言っても過言ではないんだ、これが」

「いや、それは過言でしょうっ」

口を半開きにしてレインの言動を見守っていた女性が、真っ先に抗議の声を上げた。

あれは確か、彼の副官でセノアとか言ったはず。

「……プチ同盟？」

ルミナスはオウム返しに尋ねる。なんなのだ、それは？ 全く聞いていない話である。だいたい、

レインの副官すら抗議しているではないか!?

レインの存在に気付いた自軍がざわめきはじめ、先陣から後陣へと、まるでさざ波のようにひそひそ声広がっているが、ルミナスとしてはそれどころではない。

「そうそう、後のことはまあ、クラレンスからでも聞いてくれ。俺は一応、他の将兵に教えておく構わないだろ？」

「それはまあ……というか、私が一番、事情を知りたいのですが」

「おお、悪いな。じゃあ、ちよつと馬を借りる」

レインはルミナスの言葉の後半部分を見殺して礼を述べ、その場で身軽に跳んで、ルミナスの換え馬として引かれていた馬の鞍上に立った。

重力を見殺したような、実に啞然とするほど素早い跳躍であり、止める隙などどこにもなかった。不安定なはずの鞍上で危なげなく立ったレインの姿は、三万に近いルミナス軍の全員の目に、恐ろしいまでに目立って映ったはずである。

将兵全員が「すわっ、ルミナス様がレインめに倒されたか!」と思った証拠に、全軍がどつと動揺した。無数の黒い軍旗が翻り、ざわめきが陣中に満ちる。

敵軍の将が指揮官を倒した時に戦功を示すべく、自分が獲った首を晒すのは、よくあることだからだ。鞍上に立つなどという真似をした以上、今から首でも晒す気かと皆が思った。

それ故のざわめきだが、しかしそれも、両手を広げたレインが「落ち着けっ。俺は味方だ!」と

叱声^{しっせい}を飛ばした瞬間、嘘のように収まった。

特に喚^{わめ}いているわけでもないのに、驚くほど遠くまで響くのがレインの声の特徴だが、この時も全軍の隅々^{すみずみ}にまで、レインの呼びかけが届いていた。

いや、下手をすると迫りつつある魔族軍にすら、届いていたのかもしれない。

なぜなら、レインが話しはじめた途端^{とたん}、明らかに彼らの進軍速度が鈍^{にぶ}ったからだ。

「驚くのも無理はないが——大量の魔族が侵攻してきたのを契機に、俺達は手を結ぶことになった。今、厚かましく侵略してきやがった魔族共^{ども}はレイグルにとっても敵であり、目的は共通している。

俺達はある事件を契機に、その点を大いに確かめ合い、共に戦うことを決めた……はずだ」

「なにが始まるのかっ」という顔つきで静まり返っていた軍勢も、ここでさすがに再度、ざわめきはじめた。彼らにしてみればそれも無理はないことで、小国といえどもサンクワールは最大の強敵であり、しかも景気の良い声で演説などしているこのレインこそ、霸王レイグルの最大の敵だったのだから。

いわば、地上で最も信じがたいことを聞かされたようなものである。

ちなみに先のレインの宣言は、最後の「はずだ」の部分がわざとらしく小声になっていた。

「まあ、後で詳細も伝わるだろうが、今の話は本当だぞ？ 今や俺とレイグルは、へべれけになるまで共に飲み、互いに肩を組んで機嫌良く歌うような仲——に近いと言っても過言ではない」

またしても、最後の部分をわざとらしく小さい声にしたため、真面目^{まじめ}な将兵の多くは「い、いつの間に我が主君とこやつがそんな気安い仲にっ」と、また動揺が広がった。

普通なら絶対に信じないような話だが、ザーメイン軍の将兵から見れば、「(敵将のレインは)なにをやらかしても不思議ではない男である」と常日頃から思われていて、言葉を額面通りに本気に受け止める者が多かった。

もちろん、またセノアが背後から「いや、めちやくちや過言でしょうっ」と突っ込んだのだが、それが聞こえた者など、ルミナスくらいのものである。

唯一、将兵達に真実を話す立場であるクラレンスは、レインの演説の最中、声を上げて笑っていて、止めるどころの騒ぎではなかった。

笑いの合間に、「いやあ、これは既成事実を作られちゃったな」などと呟^{つぶや}いていたので、おそろく最初からレインに異を唱える気がないのだろう。

「というわけで——」

とレインは「信じがたい話だが……本当なのか？」と全軍が思いはじめた呼吸を掴み、また大仰^{おおむさう}に両手を広げる。

「今後俺達は、手に手を取り合って戦うことになるだろう。昨日の敵は今日の友ってことだ。嘘じゃない証拠に、俺が今からあの大軍を片付けてこようじゃないか。友好の手始めになっ。皆はこの

場で、大船に乗ったつもりで見物してりゃいい」

最後に愛想よく手を振ってやり、レインは鞍上から飛び降りた。

「ど、同盟の話は、本当なのですか」

演説を終えたレインに、ルミナスが勢い込んで尋ねた。

「まあ、だいたいはい」

レインは、笑顔で頷いてやった。

「レイグルの器量次第だな。ヤツが、俺が思う以上に大馬鹿だと、今の話は単なるホラ話になっちまうだろうが、そうじゃなきゃ、最低でも俺達は敵味方じゃなくなる……まあ、当分の間は」

「はあ」

疑い深そうに見るルミナスに、レインは苦笑した。

「そう、疑うなって。だからお近づきの印に、俺が連中を片付けてやるって言っただろ？」

「まさか、今の言葉が本気だったなどと——」

「ついに、その気になってくれたか！」

ルミナスの反論より、ふいに口を挟んだアイゼンの声に、皆の注目が一斉に集まる。しかし、アイゼンは気にした様子もなく、彼にしては珍しく興奮気味にレインを見つめていた。

「いつかは決断してくれるだろうと思ったが、ようやくっ」

かつてレインと戦った彼のみにかかる理由で、安堵したように述べた。

「やりたいわけじゃないが、敵の方が『ルール無用の戦』だと公言しているからな。現に、その言葉を実証するように、既に魔法攻撃のみで全滅させられた街が幾つもある」

レインは肩をすくめた。

「だいたい、あのふざけた軍を見る」

放置していればもうすぐ矢の射程に入りそうな、魔族の大軍勢を指差す。

「まともな魔人なんか、指揮官クラスのみで、それも数えるほどしかない。軍勢の主体は魔獣とか、人外の下級魔族とやらばかりじゃないか。言ってみりゃ、犬をけしかけて俺達を片付けようとしているようなもんだ」

自然と声が陰しくなってしまったが、途端にノエルとシルヴィアに指摘された。

「おまえ、腹を立てているようだな？」

「レイン……怒ってるわねえ」

「ああ、むかついているね。特に、ヤツらのせいで全滅した街が始めてから、余計にだ。少なく

とも、レイグルはそんな真似^{まね}だけはしなかった。だから俺達^{俺達}だって、剣技と戦術のみで勝負するこ
とができたんだ」

「でも、今回は禁じ手はないと思う」

沈黙していたリユーンが、珍しく^{めずらしく}気の毒そうに言った。

「お父様も言ってた。次に聖戦が起こるとすれば——魔族軍は手段を選ばないだろうと。まさかそ
の時が、こんな早くに来るとは思わなかったけど」

「^{おのれがた}各々方！」

たまりかねたのか、そこでルミナスが介入した。

「悪いが、今はのんびり話している場合じゃない。攻めるにせよ防ぐにせよ、そろそろ陣形を——」

「だから、必要ないって！ 俺が片付けてくるから」

レインは微笑して、ルミナスを見上げた。

「今回は、そうすべきだと思う。こつちにも、街やら国やらを簡単に破壊することが可能だつてこ
とを、ヤツらに見せておく必要があるんだ……いくら気が進まなくても」

「いいのかい、レイン」

クラレンスが、彼らしくもない緊迫した顔^{おもて}で囁いた。

「それは疑いようもなく、きわどい賭^かけになるよ」

「わかってる。しかし、このままいつものやり方で戦うわけにはいかない」

「そもそも、あんな大軍を」

地響きまで聞こえるほどに接近してきた下級魔族の軍勢を、ルミナスは思わず指差した。

「簡単に排除したりできるのですかっ。いくら貴公でも——」

「自慢に聞こえたらアレなんで、日頃あまり話したことはないが」

レインはさらりと述べた。

「連中を片付ける方法はいくらでもあるが、たとえば、俺の持つこの魔剣は遠隔攻撃が可能だ。そ
の射程は、我が視界の及ぶ限り、全て！ この意味がおまえにわかるか？」

そこで、なぜかアイゼン王が、思わずといった調子で唸^{うな}り声を上げた。

「……あまり、思い出したくないな」

レインはちらつと彼を見やったのみで、特になにも答えない。

代わりに馬上のルミナスに向かい、何事もなかったように続けた。

「つまりだ！ 今、間抜け面^{づら}でこつちへ爆走してくる阿呆^{あほうども}共は、全員もれなく、俺の射程にいるつ
てことさ」

——じゃ、そういうことで！

そのまま踵を返したレインは、騒々しく喚きつつ、砂埃を上げて突撃してくる大軍へと、歩を進める。途中、仲間のほとんどが声をかけようとして……レインの顔を見て、はっとしたように口を噤んだ。そのまま、通り道を開けてしまう。

ラルファスでさえ、止めようと手を上げたものの、結局は声をかけず仕舞いだった。

ただ、最後にシルヴィアの脇を通り過ぎる時のみ、彼女がはつきりと申し出た。

「レイン……あたしにも、負担を背負わせてくれない？」

「今回のような場合、一人の方が効果的だと思う。でも、この次があったら、否応なくシルヴィアにも頼むよ。……もちろん、ノエルにもな」

続けて何か言おうとしたノエルに、レインはわざと破顔して言ってやった。

一転して、ふいに真面目な顔で問う。

「なあシルヴィア。仮にボタン一つで全てが片付くような超兵器が存在したとして、そんなものがゴロゴロ存在する世界ってのは、ぞっとすると思わないか？」

「もちろん、思うわ。戦士の存在意義が問われるしね」

なんの話？ などとありふれた返事はせず、シルヴィアはそつと頷く。

「でも、レインは今、自分がその兵器に成り代わろうとしているのよね」

「……今回ばかりは、他に道もなさそうだからな。俺達は魔族共にナメられているんだ。少なくとも連中の心得違いを正さない限り、まともな戦いなんか無理だ」

今度こそ手を振り、レインは二人を置いて歩き去った。

出鼻をくじかれたせいか、ノエルも結局はレインを見送る羽目になっていた。

自分の仲間はおろか、ついこの前まで敵だったルミナスの軍勢をも背後に残し、レインはたった一人で敵の大軍へと歩いていく。

黒い瞳に緊張感は微塵もなく、もちろん怯懦など皆無である。

ただ、シルヴィアがその顔を見たら「なんだか哀しそう」と評したかもしれない。

いずれにせよ、もう時が迫っていた。

魔族軍の先陣は短い革のズボンを穿いた、身長三メートルはあろうかという巨人兵共だったが、最先頭の一匹が、もはやレインの眼前に躍り込もうとしていた。

ずっと駆け通しだったせいか、全身に汗をかいていたが、疲れている様子は全くない。武器は、大剣を腰に吊ってはいいたが、特に抜きそうな気配はなく、ただレインを見て大仰に涎を垂らした。

「貴様が、ここでの最初の餌ってわけかあああっ」

魔法で言語変換されたのだろう、やたらと聞き取りにくい声だったが、レインはあえて馬鹿にしたように言ってやった。

「食えるかどうか、やってみるよ？」

「言われるまでもねえや、この餌があああああつ」

レインの眼前まで走り込んできたそいつは、急停止して丸太のごとき片足を振り上げ、思いつきり頭を狙って蹴りを繰り出す。

暴風かと思うような風が巻き上がり、レインの側頭部を巨大な足が襲った――が。

その攻撃はレインが左手を上げたことで、あっさり止められてしまった。おそらく、岩をも砕くほどのパワーがあったらしく、レインの左手前腕部がそいつの蹴り足を受け止めた途端、衝撃波が広がり、レインの右足がやや大地に沈んでしまう。

ただし、レイン自身は微動だにせず、無表情に相手を見上げていた。

「悪いが……単純なパワーでどうにかなるくらいなら、俺は少なくとも百回以上は死んでる」

「……あ？」

遙か頭上にある巨大な顔が、まるで惚けたように一言だけ洩らした。

なにか信じがたいものでも見るように、受けられた自分の蹴り足と、レインとを見比べている。

もはやレインはそれ以上構わず、そいつの踵に指を食い込ませて掴み、そのまま無造作にぶん投げた。途中、傷を負った巨人兵士がサイレンみたいな悲鳴を上げたが、一切頓着しない。

そいつは呆れるほど遠くまで飛んでいき、まさに今、こちらへ殺到してくる仲間の兵士達の頭上に落ちた。

驚いたのか、最前衛の巨人兵共が、騒がしく喚くのが聞こえた。

しかし、当然ながら進軍が止まることはなく、そのまま突進してくる。レインの立つ場所へ殺到するまで、あと一分も掛からないだろう。

ここに至り、ようやくレインは魔剣を抜いた。

一度、斜めに振り切った瞬間、刀身が三メートル以上の長さに伸びた。

「我が魔剣よ……どうやら、再び俺達が全力を出す時が来たらしい」

友人に語りかけるかのように、レインは青く輝く魔剣を眺める。

「貧乏クジで悪いが、今回も付き合ってくれるか？」

その瞬間、あたかもレインの要請に応えるかのように、名高き傾国の剣が眩しいほどの輝きで覆われていく。夜の帳が下りつつある周囲を、たちまちまばゆく照らすほどに。

「行くぞ、侵略者共！ この俺は、貴様達に挑戦するっ」

レインの大喝はびりびりと大気を震わせ、敵味方を問わず、全軍に響き渡っていた。

「まずは、指揮官クラス！ 次に、残りの全てを無差別に倒すっ」

言下に、レインはまず一度、大きく魔剣を振り切る。

いつものごとく、刹那の間に視界が両断されたような錯覚があり、そして次の瞬間、レインの放った不可視の斬撃は、存分にその力を発揮した。

迫りくる軍勢のうち、雑兵共はすり抜け、レインの狙い通り、散らばって下級兵士を率いていた指揮官達を、まともに襲ったのだ。

さすがに、軍勢を指揮していたのは人型をした魔族兵士だったのだが、それぞれ身体が両断されると同時に、あっさり落馬して絶命した。

ただし、彼らだけなら、せいぜい十数名といったところだった。

勢い余った斬撃の衝撃波は、そのまま軍勢を通り抜ける。

しばらくして、遥か彼方から轟音が響いてきた。下手をすると、遠くシェラザード山脈にまで届いたのかもしれない。

レインはまたしても魔剣を振り上げ、しばらく様子を見たが——さすがに多少の動揺は広がったものの、相変わらず下級兵士達の進撃は止まらない。

というより、この勢いで爆走してくる下級魔族には、もはやルミナス達の軍勢が餌の塊に見えていいるのかもしれない。

「ほざくな、餌があああ」

「いけえええ、皆で食っちまえ！」

などと喚く者が多かったことから、そもそも自分の指揮官が殺られたことすら、気付いてない者も多かっただろう。

「やはり、今更止められないか。なら、悪いがおまえ達の運命も決まったな」

一拍置き、大喝する。

「では、ゴミのように吹き飛ぶがいいっ」

またしても輝きを増した魔剣を、レインは思い切って振り下ろす。

その瞬間、明らかに派手な風切り音がして、レインの視界が派手に歪んだ。不可視の斬撃は特大の衝撃波のように走り——そして、今度はすり抜けることもなく、まともに軍勢にぶち当たった。

かつてと同じことをやってのけた時同様、レインはあえて目を逸らさなかった。

全力で放ったせいか、消耗しすぎてふらつきそうになったが、右足を引いて踏ん張り、倒れるのを防ぐ。意地でも見届けるつもりである。

敵軍を襲った斬撃は、彼らの生の肉体を引き裂いた瞬間、有り余る魔力エネルギーがその肉体を破壊し尽くしたらしく、例外なく黒い霧のように成り果てて消滅していく。

たまに血が噴水のように飛び散ることがあったが、そちらも大地が吸い込んでしまい、目に見える痕跡はほとんど残らない。

夜空に血飛沫が派手に舞い上がり、そして大地は流れる鮮血で赤く彩られていく。

先陣から後陣にかけて、魔族の大軍がたちまち壊滅に瀕していくのを、レインは一人で見つめている。つい独白が洩れた。

「これがヤツらの歯止めになればいいが……しかし、そう簡単にはいかないか」

もちろん、レインの戦いぶりを、仲間達も呆然と見つめていた。

驚いていないのは、レインの実力を本当の意味で知るシルヴィアと、以前、自国の軍勢でレイン一人と戦った経験を持つ、アイゼンくらしいものだろう。ノエルでさえ、「あいつ、あそこまで大規模な攻撃が可能だったのか!」と呆れていた。

いや、もう一人……驚くどころか、むしろこうなることを予期していたであろう者がいる。

ドレス姿のシエルファである。

おそらく、彼女本来の人格は奥に引っ込んでしまっているらしく、冷え切った笑みを広げたまま、陶然と目を閉じ、両手を広げて満天の星を仰いでいた。

「この激しく荒ぶる波のような波動……本当に心地いいわ……ああ」

感激したかのようにため息をつき、声が震えた。

「あの人の……レインの力の波動を全身で感じるもの」

その言いように、そばにいた全員がそっと顔を見合わせる。

変貌ぶりに度肝を抜かれたのか、このような時には必ず話しかけてくるフォルニアですら、遠くからそっと彼女を眺めていた。

やがて、辛うじて遠隔攻撃の影響範囲外だった敗残兵達が、来た時より遥かに速いスピードで遁走していくのを見て、ようやくラルファスが軽く息を吐いた。

「シルヴィア殿が、前に魔獣の大軍を消滅させた時と似ているが」

ラルファスが独白する。

「しかし……今回、威力はそれ以上だな」

「そうね。あれほどの大軍のうち、明らかに七割近くが消滅してるものね」
シルヴィア自身が大きく頷く。

「でも、これでもレインは手加減してると思うわよ。やはり、一撃で全滅させるのは忍びないと思
ったのでしょう」

「だが……新たな魔王が誰か知らんが、魔族には気性の激しい戦士が多い」

まさに気性の激しさでは人後に落ちないノエルが、憂うように口を挟んだ。

「新魔王の采配次第では、向こうも同じことをするぞ」

「既にされてるからこそ、レインがあえて実行に踏み切ったのよ」

シルヴィアはようやく戻ってきつつあるレインをじっと見つめ、答えた。

「もう街が幾つも消滅させられているわ。どこかで彼らに歯止めをかけないと、それこそ戦い以前
にこのミュールゲニア世界全体が荒廃してしまう」

「……だから、『その気になれば、こちらにも同じことができる』と、レインはそれを見せつける
ためにやったわけだな」

最初から察していたラルファスが痛ましそうに首を振る。

「いつものことだが、嫌な役目を押しつけてしまった」

「しかし、これは必要なことだろう。むしろ、そういうことが可能な戦士がこちらにいたことを、我々
は喜ぶべきではないかな」

アイゼンが取りなすように述べたが、それに答える者はいなかった。

ここにいる者の多くはレインの仲間であり、この攻撃の潜在的な意味と効果よりも、レインの哀
しみを思っ暗い気分浸っていたからだ。

☆

言葉を失ったまま、終始驚きの表情を張りつかせていたルミナスは、それでもきちんとレインに
礼を述べ、自軍が本拠とする砦へ軍勢と共に引き上げていった。

あれほどの被害を受けた魔族軍である。さすがに、すぐにまた国境へ軍勢を差し向けるとは、考
えにくかったからだ。

その意味では、もはや今、国境に執着する意味はない。

ただレインは、いつもにも増して口数が減ったルミナスが去る前に、慰めの言葉をかけてやった。
「レイグルだって、その気になりや、あれくらいのはやれるさ。だけど、あいつはあえて今まで、
そんな真似をしなかった。だからこそ、俺達だって人外の力を振るうようなことはしなかったんだ」